いたずら仕掛け人

中三の孫は大の巨人ファンで、私は中日びいき。このいたずら坊主が、先日猫なで声で「ドラゴンズを詳しく紹介した本が出ているので、買ったら」という。

猫なで声は危険信号なのだ。「その手はくわないよ。お子様向けの恐竜の本だろうが」「信用しないんだなぁ。本当に中日に関した本だっていうのに」。それほどまでいうなら、と書店に行き、隅々まで探したが見つからない。

ハハーン、これだな、と気づいたときは後の祭りで、正体は「中日大辞典」。たしかに「中日（中国語と日本語）」に関する詳しい本には違いないが、それにしても腹が立つ。こうなったら、天神様に坊主の高校入試絶対不合格祈願の絵馬を奉納せねばなるまい。それも、特別大きく、目立つ、ご利益のあるやつを。

（宮城県・破顔亭立腹・65歳）

〔注〕「朝日新聞」日曜版　一九八六年五月二十五日所載記事。

日中友好の橋、文化交流の船

―愛知大学中日大辞典増訂版の刊行

今泉　潤太郎（愛知大学教授）

中日大辞典改訂の歩み

訪中学術代表団は大きな成果をえて帰国した。座談会でも辞典は高く評価された。数百項目にのぼる具体的な指摘も有益であった。上海訪問の際、筆者らはたまたまバスの中で中日大辞典を腋にかかえた中年の中国人女性と隣り合わせ、尋ねてみると上海市教育局に勤め仕事上よく利用しているとのこと、一行の来訪も『人民日報』で報道されたので承知している由、偶然の出来事なので感銘ひとしおであった。南開大学に対しては愛知大学として正式に両校間の交流を提案した。状況が許せば応じたいとの返事であったが、両校間の協定が実際に締結されたのは文化大革命が終り四年目の昭和五十五年の事である。このたびの訪中が愛知大学の中国との学術交流に果たした役割も実に大きなものがあった。昭和五十年鈴木は前年胃切除の大手術を行った身を鞭打つごとく辞典改訂の決意を披瀝した。内山は長年月の辞典編集の苦労がこたえたのか健康上不安を感じており、訪中代表団の参加も断っていたので、改訂の仕事には加わる考えは無かった。予感があったのだろうか、この年の八月不帰の客となったのである。筆者は協力を約し、結局鈴木は辞典改訂に専念すべく教授を辞した。四月、大学当局は正式に辞典編纂処を設置し、鈴木を編集主任、筆者を編集委員長、陶山信男、荒川清秀、黄異をメンバーとする編集委員会を発足させた。文化大革命を経て四つの現代化を目指す中国では学術界も活気を呈し、各種辞典をはじめ工具書も初版編集時とちがい多数出版されていた。昭和五十五年から愛知大学は中国教育部派遣の研修教員の受け入れをはじめ、また北京語言学院との間で交換教員制度を発足させえたので、毎年数名の中国人教員が来学するようになっていた。これらの中国人教員の協力は辞典編集にとって大いに役立った。北京農業機械化学院黄志明教授は二年間にわたり編集に協力、帰国後半年足らずで病を得て逝去されたことは特に銘記されねばならない。改訂作業も軌道にのった昭和五十六年一月鈴木択郎が急逝した。その生涯をかけた辞典編纂の情熱は最後の瞬間までうしなわれなかった。鈴木の発意ではじまった改訂であり余人を以っては替えがたいが、当初より助勢してきた筆者が以降中心となり、ついに昭和六十一年四月増訂版が完成した。改訂編集を始めてから十一年、初版編集開始より数えれば実に三十一年の日子を費やしている。今回の改訂は初版の枠組内での前面増補であり、辞典の基本的性格、編集原則は変更せず、誤りを正し不備を補うこと、できる限り新語彙を加えることに重点をおいた。時間的にも無理であっ

たが「漢語詞滙的統計与分析」「国家標準信息交換用漢字編碼字符集」「統一漢字部首表」「起筆統計表」「漢字拼音正詞法基本規則（試用稿）」「普通話異読詞審音法」等々を織りこんだ改訂は今後に期することとした。「普通話異読詞審音法」は三十年ぶりに文字改革委員会から発表されたものである。初版編集の時、審音に関して百項目に近い質問を同委員会に出したが返事はなかった。それがなんといま回答が出たわけである。かくして完成した増訂版は初版にくらべ七百頁増の二千七百頁、見出字二千字増の一万三千字、新語を加え十四万の語彙をもち、初版の特徴を生かした最新の本格的中日大辞典である。

日中友好の橋、文化交流の船

本年五月三十一日、中日大辞典増訂版出版記念会と中国国家教育委員会への辞典贈呈式が開催された。席上中国側を代表して中国大使館陳彬参事官はこの辞典を「日中友好の橋、文化交流の船」と評し、贈呈に対し謝意を表するとともに刊行を祝福した。これに先立つ五月二十一日には折から来日中の何東昌国家教育委員会副主任と東京において会見、会談のなかで日中両国民の協力で完成させ発展させてきたとも言えるこの辞典が、中国でも広く利用されてきたことを責任者の口から直接聞くことによってあらためて強く認識させられた。現在の日中間における交流の発展は十年前二十年前とは較べることもできぬほど大きなものである。辞典のごとき工具書は両国ともにますます必要になってきている。前述の各資料を参照し、今後の発展に応ずることのできる中日大辞典としていくのは日中両国民の付託に応える愛知大学の責任とも言えよう。また、愛知大学内においてみれば、辞典編集にあたった中国語教員の熱意およびこれを支援した大学当局のみでなく、愛知大学で中国語を学んだ学生たちが三十年余にわたって辞典編纂にかかわるさまざまな仕事に協力してきた事実があるからこそ『愛知大学中日大辞典増訂版』の名に背かないのである。日中両国民の合作と愛知大学教職員学生の協力で完成させた辞典をいかに継承させるかがこれから問われるのである（文中敬称略）

〔注〕「大学時報」一八九号（一九八六年七月）所載。

公開しながら〝秘密〟とは

日本でもそうだが、僕、旅先ではデパートと本屋さんに必ず寄る。その土地の生活水準、文化水準がわかるような気がするからだ。

中国で南方へ取材に行った。例によって、町の中心部の本屋へ。中国の本屋さんは、例外を除いて「新華書店」という屋号である。二階の学術図書コーナー、熱帯植物の研究など地域の特色があった。その一隅「日語関係」のコーナーをみつけた。「日語」とは日本語。ここではほかに日本関係図書も入っていた。これは面白い、と十冊近くをカウンターに持っていった。と、ガイドの女性に店のオヤジが何か言っている。聞き耳をたてると「これは、外国人には売れない」。その書名は『中日大辞典』。同じ経験は東北地方でもあった。『中国共産党史』。

こんなクレームがつくだろう、とわかっていた。でも、万一お目こぼしにあずかればの期待、ダメ元精神からのチョッカイなのだ。というのは、この二つ、ともに奥付けに「内部発行」と書かれているからだ。このころは、僕は少しは事情通になっていたのだが、当初「内部発行」という字を見れば、えらく興奮したものだ。「秘密文書をみつけた！」という気になって。「内部」ものは、外国人には〝秘密〟になっていたから。

「内部発行」には、いくつかの種類がある。辞典など完成品ではなく、広く意見を求め修正して、あとで公刊されるもの、ある研究組織や行政機関などが特定の読者を対象にしたもの、地域を限って発行するもの、などである。もう一つ、日本の出版社が聞くとヨダレが垂れそうな話。それは、中国での出版物は最低でも五万部は出る。いや、それ以上売れるものでないと、出版しにくい。紙が十分ではないからだ。そこで、どうしても出版したいものがあると「内部発行」の手続きをとる。そうすれば、千部でも一万部でも出版許可が得られる、という仕組みがある。『党史』の方は、未完成品。『辞典』は、実は未完成品ではなく、海賊版。そう「内部発行」のもう一つは、この海賊版。そして、その種類が圧倒的に多い。『辞典』は日本製。いま、日本では改訂したてで六千八百円だが以前は四千八百円。それを中国では十元（当時で日本円約千円）の安さで売っていた。紙質や表紙がやや違うが、写真製版らしく中身は全く同じ。海賊版は学術・専門雑誌にとくに多く、ある専門図書館をのぞいたら、書架がこの手の雑誌で埋まっていた。

もっとも、中国は万国著作権保護条約に加入していない。だから、違法というわけではない。いま、加入検討中で、その前準備として国内の著作権問題と取り組んでいる。

同じ「内部」ものといっても、これだけではない。『内部参考』という高級幹部向けの雑誌、『参考資料』という情報誌など、「機密」や「極秘」と表紙に印刷してあり、書店にはない。

〔注〕　中公新書「現代中国百景」今田好彦　昭和六一年九月「ヒゲで撫でた胡同」所載。

愛大四〇年

今泉　潤太郎（愛知大学教授）

愛知大学が豊橋市に創立されたのは二十一年一月。ことし四十周年を迎えた。卒業生は短大、二部を含め計六万六千人。東三河地方だけでなく、全国の各界に広がっている。上海の東亜同文書院大学など、終戦で閉鎖された日本の海外大学の後身として創立された経緯などから、中国との交流、研究では常に他をリードしてきた。四十周年を機に、これまでの歩みを振り返って見る。

7回の増刷、全国へ

中日大辞典　上

中日大辞典発刊以来、十八年ぶりの増訂版が完成、ことし四月、最初の刷り上がり百五十冊が、大学に届いた。編さん委員長の今泉潤太郎教授（五三）は、浜田稔学長（五七）と岩井透事務局長（六〇）＝現・参与＝に見せた後、著書贈呈分の五冊を抱え、同辞典生みの親の故鈴木択郎教授宅に走り、仏前に供えて報告した。「先生、やっとできました」。

鈴木らが、上海東亜同文書院大学時代に書きため、敗戦により接収された十四万枚の辞典原稿カードが中国側の好意で二十九年暮れ、返還になり、翌春から、鈴木を委員長に愛大での中日大辞典編さんは始まった。

卒業を控えながら就職先の決まらぬ教え子・今泉も、鈴木の勧めで見習いとしてメンバーに加わった。

当初、五年間で完成の予定だった。だが、頼みのカードは戦後の中国の変身で既に古典。再び、ゼロからのスタートとなり、十三年後の四十三年二月、ようやく刊行にこぎつけた。

訂正前の原稿の一部が、そのまま印刷されるミスを寸前に発見し、再訂正とあわただしく刊行を迎えた鈴木らが、喜びにひたったのは三ヶ月後。画期的な辞典完成に対し、中日新聞社から編さんグループに中日文化賞が贈られた。授賞式のあった夜、鈴木は、既に助教授になっていた今泉らを自宅に招き「長いこと、ご苦労さん」と初めてねぎらいの言葉をかけた。

中日大辞典は七回も増刷、計七万部出版し「愛大の中日大辞典」として全国に知れ渡った。

（敬称略）

中国を訪れ検討会

中日大辞典　下

千二百冊の中日大辞典を中国に贈った後、「もしかしたら」の期待を込めて申し入れた中国公式訪問が四十八年に実現。鈴木択郎団長率いる愛大学術訪中団は、南開、北京、復旦の三大学でそれぞれ辞典の内容についての検討会を行った。

中国側は「中日友好に役立つ優れた辞典」と評価したうえで、現在の文化、生活に合わないと約二百項目を指摘。訪中団は、将来の改訂を約束して帰国した。

約束を果たすべく五十年、今泉潤太郎を委員長に編さんを再開。鈴木は自ら教授職を退き、この作業に専念。七十歳代の半ばを超え、体調を崩したこともあり、急いでいた。

五十五年暮れ、一応、全部の原稿に目を通し終わって帰宅した鈴木は妻しづ子（八〇）にうれしそうに言った。「若い人がいるからもう安心だ」。翌年一月六日朝、鈴木は中国語で何か歌った後、静かに息を引き取った。八十二歳だった。

それまでの中日大辞典より六百ページ増え、二万語多い十四万語を収録した増訂版の完成は鈴木の死後、さらに、五年間かかったが、すでに一万四千部も出ている。

「増訂版も鈴木先生の辞典。私はピンチヒッターでしのいできただけ」と今泉はいう。「今度は自分の」とは口にしなかったが、今泉が「中日大辞典」とかかわってもう、三十年が過ぎた。

（敬称略）

〔注〕中日新聞　昭和六十一年（一九八六年）一二月二日、三日所載。

『中日大辞典』1000冊を寄贈へ

原稿カード返還40周年　愛大が友好協会に

中国研究者必携の辞典として知られる「中日大辞典」を編さんしている愛知大学中日大辞典編纂（さん）処は、辞典のもとになった原稿カードが中国から返還されて四十年になるのを記念して、中日友好協会に同辞典一千冊を寄贈する。二十八日、石井吉也学長が東京の中国大使館を訪れ、徐敦信大使に目録を手渡す。

二千八百㌻、約十四万語が収録されている同辞典は、国内最高水準の中国語辞典で、一九六八年の初版発行以来、十二万三千冊を出版。香港や北京でも販売され、中国政府には、これまでに愛大から約五千冊が贈られている。

中日大辞典は、愛知大ゆかりの東亜同文書院（中国・上海）が一九三二年に「華日辞典」として出版を計画。辞典の原稿カードを作成中、敗戦のため没収され、その後、中国政府の管理下に置かれた。五三年、当時の本間喜一愛知大学長が郭沫若中国科学院院長にカードの返還を要望。「日中文化交流の懸け橋」として翌五四年、辞典編さんの準備をしていた愛大に引き渡された。

返還四十周年記念事業では、寄贈とともに、九八年刊行をめどに同辞典を全面改定することも決定。八〇年代以降の中国の改革・開放路線に伴う学術成果を盛り込んだ内容にする。

〔注〕中日新聞　一九九四年七月二八日所載。

愛知大が中日友協に辞典千冊を贈呈

原稿カード返還　40周年記念

中国語辞典の最高峰の一つ『中日大辞典』（愛知大学中日大辞典編纂＝へんさん＝処編）の刊行のきっかけとなった、東亜同文書院制作「華日辞典原稿カード」の日本変換四十周年を記念する、中日友好協会（孫平化会長）への同辞典一千冊寄贈が七月二十八日、東京・港区の駐日中国大使公邸で行われた。同辞典の編纂にあたる愛知大学（石井吉也学長）が行った。

『中日大辞典』の編纂は戦前、中国研究の中心地とされた上海の東亜同文書院で企画され、原稿カード約十四万枚（約七万語分）が作成されたが、敗戦でカードを国民政府軍に接収された。しかし、終戦当時の同書院院長で愛知大学学長の本間喜一氏は、編纂をあきらめきれず、日中文化交流に貢献したい―と内山完造日中友好協会理事長を経て、郭沫若中国科学院院長（後の中日友好協会名誉会長）に返還を希望。その結果、翌一九五四年の引揚船「興安丸」で、日中友好協会本部（東京）へ届けられた。

協会はこれを同書院関係者を中心に四六年に設立された愛知大学にゆだね、同大学では五五年四月から鈴木択郎教授を編集委員長に関係者が編集に取り組み、六八年二月に初版を完成させた。

以来、同辞典は出版部数十二万三千冊を数え、豊富な語いと百科項目などを持つ中国関係の総合辞典として、国内外の関係者に広く活用されている。この日の式典には、愛知大学の石井学長、今泉潤太郎教授（中日大辞典編纂処所長）、山下輝夫事務部長兼広報課長と、中国大使館から徐敦信大使、呉江浩二等書記官、井頓泉三等書記官らが出席。

石井学長は、『中日大辞典』増訂第二版数冊と中日友好協会への一千冊増訂目録を手渡したあと、「ことしは辞典刊行の契機となったカード返還四十周年の記念の年。辞典はまさしく、日中友好、日中学術交流の産物です。カード返還にご尽力いただいた中日友好協会孫平化会長に千冊を寄贈して、感謝の意を表したい」とあいさつ。九八年に出版予定の辞典新版のほか、コンサイス版、ＣＤ版の編集の取り組みなど事業の現況も紹介された。

徐大使はこれにこたえて「確かにお受け取りし、直ちに中日友好協会にご連絡いたします。大辞典は引き続き未来への日中関係の中で、両国の人材養成、文化交流に役立つものと信じます」とお礼の言葉を述べた。

出席者はこの後、日中文化交流の展望などについて和やかに語り合った。

愛知大学では従来、中日友好協会や中国国家教育委員会など中国側の関係機関に同辞典を五千冊増訂している。

〔注〕「日本と中国」第１５５５号　一九九四年八月一五日所蔵。

競う　ライバル物語

中国文化研究のパイオニア③

中国・上海にあった旧制高等専門学校「東亜同文書院」の中国語教育の伝統は、愛知大学にしっかりと受け継がれた。

教養課程には、英独仏露語とともに中国語が必修となった。また、中国語の授業は、同文書院で使用された「華語萃編」が再び教科書になった。学生たちは、少人数のクラスで熱心に学んだ。

日中間の国交は断たれていたころ。だが、学生たちは生きた中国語を覚えていったのである。

当時、文学部で中国文学を専攻していた現名誉教授の今泉潤太郎（七一）はこう回想する。

「新中国になってから、北京語をもとにした普通話（共通語）が確立した。『華語萃編』にも社会主義体制下、労働者中心の社会の中で新たに現れた語彙を採用するなど若干の改訂を行ったが昭和四十年代まで使った。実際の中国人の会話を取り入れており、日中両国の教員が教えるところも書院の伝統を守っていた」

同文書院の生え抜きの教授陣は、発音の基礎から中国語を学生にたたきこんだ。その中の一人に、のちに大きな足跡を残す教授の鈴木択郎がいた。

同文書院の支那研究部華語研究室で研究していた鈴木は一九三三（昭和八）年、華日辞典の編纂を呼びかけた。ここに、中国語の〝バイブル〟ともいわれる「中日大辞典」編纂に至る長い道のりが始まった。

編集方針は、井上翠が編纂し、戦前出版され、評価が高かった「井上支那語辞典」が出発点。語彙の数は七万―八万語。語彙の収集のために作成された資料カードは十四万枚に達した。作業にあたったのは、鈴木のほか十人の日本人教員と中国人講師八人だった。だが、編纂作業は日中戦争、太平洋戦争のため停滞。敗戦後は、中華民国側に東亜同文書院が接収された際、辞書編纂にかかわる資料も引き渡された。

戦後の混乱も少し落ち着いた昭和二十八年七月、鈴木は愛知大学学長の本間喜一から辞典原稿の返還を中国側に願い出る計画を聞かされた。その四年前の十月一日、毛沢東が北京の天安門で中華人民共和国の成立を宣言していた。

そこで鈴木は、接収されたときのことを思いだした。

「もし、事情が許すようになったら、われわれの手でこの辞典を完成させてもらいたい」。口頭で申し出ていたのである。

早速、日中友好協会の内山完造理事長を通じて中国科学院の郭沫若院長に願書を送っ

た。内山は戦前、上海で書店を営み、魯迅など中国の知識人と交流が深かった。郭は日本留学の経験があり、知日派の知識人だった。話はトントン拍子に進んだ。

郭の斡旋により、辞典原稿は「日中文化交流のため、改めて日本人民に贈る」ことが決まり、昭和二十九年九月、辞典編纂の資料カードが引き揚げ船「興安丸」に託され、日本に返還されたのである。

翌三十年四月、愛知大学に辞典の編纂委員会が設立され、いよいよ編纂作業が本格化した。

スタッフたちは資料カードの作成、整理、例文収集などに黙々と取り組んだ。今泉は文学部を卒業すると同時に文学部の助手として作業に加わった。「講義以外の時間は、すべて辞典の編纂にあてていた」。そう言うように、今泉は半生を辞典編纂にささげた。

最初の計画では昭和三十六年に完成する予定だったが、作業は大幅に遅れた。

中国で漢字を簡略化する文字改革が行われたこと。原稿の書き直しを迫られたことや、三千字にのぼる新旧の漢字の活字を鋳造したことなどが主な理由だった。

資料カードの返還から十三年。四十二年十一月、ついに中日大辞典の初版が完成をみた。

漢字は簡体字を、発音の表記には中国式ローマ字記号を採用した中日大辞典は四十三年二月、初版一万部が発売された。政治、科学用語から方言、四字成語など約十二万の見出し語を収録した内容は日本だけでなく、広く中国語圏でも高い評価を受けた。中国や台湾では、海賊版まで出るほど、大きな反響を呼んだ。

昭和六十一年に増訂版、翌年に増訂第二版が出された。大辞典の出版を手がけている大修館書店によると、六十一年から現在に約十万部が販売されたという。

今では、日本全国で中国語を学習したり、中国研究に従事する人たちに欠かせない参考書となっている。

（敬称略）

〔注〕産経新聞　平成十六年（二〇〇四年）一月十四日（水曜日）所載。

両親に会える「中日大辞典」

父　欧陽可亮さん　　母　張禄沢さん

〜読者から〜

今年一月十三日から朝刊で連載された「競うーライバル物語　中国文化研究の

パイオニア　愛知大学VS大東文化大学」。ここで取りあげられた「中日大辞典」（愛知大学編）の編纂作業に協力したスタッフの中に、私の父「欧陽可亮」と「張禄沢」がいます。二人とも亡くなっていますが、両親に会いたくなると、私はこの辞典を開きます。

関登美子（五八）＝兵庫県宝塚市

中日大辞典は上海にあった日本の旧制高等専門学校（後に大学）の東亜同文書院で中国語を日本人学生らに教えていた鈴木拓郎教授（後に愛知大学教授）が一九三三（昭和八）年、質の高い中日辞典の必要性を呼びかけ、編纂がスタートしました。

作業にあたったのは日本人教員十人と中国人講師八人。そのうちの一人が欧陽可亮さんです。唐の時代から書家や詩人を輩出した文人一族の出身で、一九一八（大正七）年、北京生まれ。中国の大学を卒業後、昭和十七年四月、東亜同文書院の講師となり、この辞典の編纂に参加しました。

終戦後、東亜同文書院は中国側に接収され、欧陽可亮さんも「日本への協力者」として厳しい状況に置かれ、混乱の中、一家で台湾に移り、その後、昭和二十九年十一月に来日したそうです。

東亜同文書院の流れをくんだ愛知大学に、接収された辞典の資料カードが中国側から返還されたのを機に、翌三十四年四月から、辞典の編纂が再開されました。

この作業に欧陽可亮さんも戻り、張禄沢さんも加わりました。日中の完璧な北京語が話せる人は少なかった時代。二人は中国語ネイティブの専門家として特に貴重な存在で、例文に関する多くの疑問に答え、どの語彙を収録するかについて助言。

張禄沢さんは愛知大のある愛知県豊橋市で地元の女性に中国料理の講習会を開くなど、文化交流にも励み、編纂作業をともにした愛知大の今泉潤太郎・名誉教授は「学生の指導も丁寧で、人格的にもすばらしい女性だった」と印象を語ります。

欧陽可亮さんは国際基督教大学などで中国語の教鞭をとり、外務省研修所で日本の外交官に中国語を指導。張禄沢さんも愛知大の中国語講師として活躍しました。二人は日中の文化の懸け橋の役割を果たしたといえるでしょう。

〜戦争を挟んで編纂、日中の文化結ぶ〜

〔注〕産経新聞　平成十六年（二〇〇四年）三月十四日（日曜日）所載。